

晩年の佐藤定吉における「日本」と「キリスト教」

住家 正芳ⁱ

佐藤定吉（1887-1960）は、もともとは科学者でありながら、大平正芳元首相が若年の頃に影響を受けて参加したキリスト教運動である「イエスの僕会」を始めた人物である。本論文は、その佐藤定吉の最晩年の著書を資料として、佐藤定吉にとっての「日本」と「キリスト教」がどのようなものであったのか、その両者と「科学」をどう関連させたのか、そして佐藤は何を自らの「問い」とし、「答え」としたのかを明らかにする。佐藤は、キリスト教信仰と天皇への崇敬との間に葛藤を抱え、科学者としての道から離れ、宗教活動へ入って行った。そうした佐藤にとっての「科学」とは、神の真理を読み解く営為であり、そうした「科学」によって読み解かれた「キリスト教」は、自らが他者の罪を負う「神の小羊」になるべきものであった。そして、佐藤にとっての「天皇」は、他者の罪を負う「贖罪愛の祭司王」であり、そうした「天皇」と国民が一体化した「日本」は、国家の救いを指導して「神の国」の実現をもたらすべき存在であった。なお、こうした佐藤の思想には寛克彦の影響を見出すことができる。

キーワード：佐藤定吉、寛克彦、山蔭基央、日本的キリスト教、科学と宗教

はじめに

香川県立図書館の大平文庫は、大平正芳（1910-1980）元首相の蔵書を取めたものである。その中に、佐藤定吉（1887-1960）による『日本ということ』（佐藤 1964）¹⁾と『日本とはどんな国：秘められた人類救済の原理』（佐藤 1974）という本がある。後者は前者を改版したものである。著者の佐藤定吉は、まだ10代だった大平が参加したキリスト教の学生団体「イエスの僕会」を始めた人物である²⁾。『日本ということ』は、前半と後半に分かれており、前半部分の序文は1959（昭和34）年10月10日、後半部分の序文は1960（昭和35）年2月11日となっている。佐藤が死去するのは1960（昭和35）年12月23日であることから、本書は佐藤の最晩年の思想を展開したもの

ということになる。

大平正芳はすでに20代の頃には「イエスの僕会」や佐藤の思想から距離を置くようになっており、1910（明治40）年生まれの大平がこれらの本を発行された年に手に取っていたとしても54歳と64歳の時である。そのため、若い頃を懐かしむことはあったとしても、「秘められた人類救済の原理」という副題を持つ書籍の内容に影響されたり共感したりしたとは考えにくい。そもそも、大平文庫に収蔵された両書ともに書き込みは無く、大平が実際に目を通したのかどうかも分からない。大平が自ら買い求めたのか、あるいは誰かから贈られたものなのかも不明である。

佐藤定吉は日蓮宗寺院の住職を父として徳島県に生まれ、三高在学中にキリスト教に触れて、東京帝国大学工科大学へ進んだ後に洗礼を受けている。卒業時には明治天皇から恩賜の銀時計を与えられ、20代後半で東北帝国大学教授となったが、徐々に宗教

i 立命館大学産業社会学部教授

活動に軸足を移して教授の職をなげうち、30代の終わり頃から全国の高等学校や大学の学生への伝道活動である「イエスの僕会」を始めた。大平正芳は高松高等商業学校在学中に佐藤の講演を聞いて感化され、軽井沢や東京での集まりに参加するほどに入れ込んだが、一橋大学へ進学した後は佐藤の活動と関わりを持った形跡はない。

大平が離れた後の佐藤定吉は、1941(昭和16)年に「イエスの僕会」を「皇国基督教会」に改めるなど、戦争が激化してゆく中で、もともとあった天皇崇拝と愛国主義の傾向をより強めていった。戦後もそうした傾向は変わらなかった。そのことについては、たとえば佐藤の娘婿である服部治という人物が佐藤の追想録に次のように書いている。

もともと明治ナショナリズムに培われた先生は、昭和の時流に容易に即応していった。その説かれる日本的基督教は、ついに皇国基督教にまで発展したので、聖書の真理に固執する人たちは、次第に脱落、または分離するに至った。〔中略〕今にして考えると、「昭和維新」といい、「全東洋をキリスト教へ」というのも、多分に当時の八紘一宇の色彩を帯びていたようである。先生は愛情の深い人であったから、こうした脱線も日本を愛されたからに違いない。ただそこに義の観念が乏しかった。もとより誤りは誤りとして、遺憾にたえないのは、先生からそれについて一言も告白を聞くことが出来なかった点である。(服部 1970: 535)

服部自身、もともと佐藤の熱心な支持者だったが、ここで言う脱落、分離した一人であった。服部には、「皇国基督教」へ傾斜してゆく佐藤は「時流に容易に即応していった」もののように見えたわけだが、「明治ナショナリズムに培われた」と言っているように、佐藤の「ナショナリズム」は昭和期よりも前からの根を持っていた。佐藤の「ナショナリズム」は、根が深い分、敗戦にもびくともしなかつたとも言える。

佐藤自身が以下のように書いている。

敗戦後、屢々講演会で私などが「天壤無窮」とか「八紘為宇」とかの言葉を用うると、周囲の人々は、何か爆薬物にでもふれたように怖れて顔を蒼白にしたものだった。なぜに「天壤無窮」が悪いのか、なぜにそんなに、「八紘為宇」の言葉を怖れるのか。その言葉のもつ真理性を知らない国民の無智が、ああした不要の恐怖を与えたのであつた。(後 82)

敗戦を経ても、佐藤は天皇崇拝と愛国主義の傾向を変わず保持し、むしろより強めたとすら見える。もちろん、敗戦の経験は佐藤にとっても大きなものであった。だが、佐藤はそれをイエスの復活のような画期として、「日本魂」を復活させ、新たに誕生させてくれるものであると解釈した。佐藤にとって「新日本は、いま誕生しつつある」(前 47)のであった。

恩賜の銀時計を与えられ、東北帝国大学教授ともなった佐藤は、間違いなく知識人の一人ということになるが、植村和秀(2010)は昭和期の知識人の態度を分類して、「理の軸」と「気の軸」を設定している。前者は丸山眞男と平泉澄に共通するものとして抽出された特徴で、理念にこだわり、理想を掲げ、論理的であって、政治的な主体化への意欲が強調されるといふ。こうしたいわば「理屈の人」(植村 2010: 20)は客観的な状況の変化に動じず、転向するようなこともない。一方、後者の「気の軸」は西田幾多郎と蓑田胸喜に見られる特徴であり、理念や理想よりも「絶対的なるものを求め、根源からの起動を目指し、流れや勢いに乗って気力を競い合い」(植村 2010: 23)、理屈にこだわらないという点で、およそ論理的ではない。

この分類を当てはめると、佐藤は「理の軸」の人としての傾向を強く持っていたと言える。他人から「昭和の時流に容易に即応していった」(服部 1970: 535)ように見えたのは、佐藤にしてみればむしろ時流の方が佐藤の「ナショナリズム」に近づい

たのであって、佐藤自身は自らの掲げる理想に向け、あくまでも論理的に思想を構築しようとしており、敗戦という客観的な状況にも動揺することはない。

戦争に負けても、勝つても、真理はどこ迄も真理である。戦争に負けたからとて神の真理を曲げることは、日本自らを永遠に葬ることになる。真理こそ唯一の必勝者であるからだ。(前 98)

では、その「神の真理」とは、佐藤にとってどのようなものだったのだろうか。また、佐藤はなぜ、それを「真理」とみなしたのだろうか。『日本ということ』において佐藤は、佐藤なりに解釈した「キリスト教」と、これも佐藤なりに解釈した「日本」の「神道」と「天皇」、そして研究者としてたずさわった科学とを接合させている。たとえば、次のような調子である。

「人生」と「世界」と「宇宙」が歩む「いのち」の道について、こういう万古不易の鉄則を、原子核内部の素粒子の在り方が、声高らかに叫んでくれているのである。ここに天壤無窮の「神ながらの道」の実態が、明確に具体的に開示されていると思う。(後 85)

佐藤の展開する思想は、天皇中心主義的な神道理解による日本論にキリスト教や科学に関する知見を独特の論理で接合したものであり、佐藤自身は科学を標榜しつつも、他者からは非科学的と指弾されてもしかたのない趣きを持つものではある。

しかし本論文は、こうした佐藤の主張の論理的整合性や、それが科学的か否かを問いたいわけではない。本論文は、佐藤はそれを信じた、ということを出発点とする。その上で本論文が問うのは、佐藤にとっての「真理」はどういうものであったのか、そうした内容が佐藤にとっての「真理」であったのはなぜか、そしてそうした「真理」に「答え」を見出した佐藤にとっての「問い」は何だったのか、である。

一方、こうした佐藤の思想は、国家主義や天皇制との癒着が批判されるべき「日本的キリスト教」の一例とされてきた。「日本的キリスト教」の事典的な説明においても佐藤は代表例の一つとして挙げられており、そこで「日本的キリスト教」は、「1930年代に現れた、キリスト教の教説を日本の伝統と様々な方法で関連づけて理解しようとする試み」と定義されている(日本キリスト教歴史大事典編集委員会 1988: 1063)。たしかに、先の引用の中にある「神ながらの道」という言葉が独特の「古神道」論や国体論を展開した笈克彦の思想を連想させるように、佐藤は「愛国的皇室中心主義」(佐藤 1928: 6)を標榜していた。とはいえ、佐藤の思想は「1930年代に現れた」わけではない。

佐藤の思想が昭和期以前からの根を持つということからは、戦時中の狭義の「日本的キリスト教」に限らず、それを包摂し準備した、より広義の「日本的キリスト教」のすそ野の広がりが見られる。実際、「日本的キリスト教」についての先駆的な研究において笠原芳光も、国家主義的な傾向を持つ狭義の「日本的キリスト教」と、内村鑑三以来、日本ということを自覚したすべてのキリスト教という意味での広義の「日本的キリスト教」とに分けている(笠原 1974: 116-117)。佐藤の「日本的キリスト教」もまた、内村鑑三の「二つの J」、すなわち Jesus と Japan への献身、という緊張関係の流れを汲む近代的課題とも言える「日本」と「キリスト教」の関係に対して試みられた「答え」の一例なのである。

ただし、笠原は広義の「日本的キリスト教」の例として矢内原忠雄を挙げ、それが国家主義を批判した点を「良心的」と評価し、それとは峻別される狭義の「日本的キリスト教」は国家権力への順応、癒着を批判されるべきものとしている(笠原 1974: 136)。他方で、「日本的キリスト教」には、キリスト教が日本文化や日本社会において意義ある存在となるための可能性も潜んでいたのではないかと指摘されてもいる(原 2005: 50)。いずれにしろ、「日本的キリスト教」は、日本社会におけるキリスト教

のあるべき姿や存在意義という規範的な観点から論じられる傾向があると言える。

しかしながら、こうした規範的評価の前に、「日本」や「キリスト教」という項目を設定した議論に対しては、次のような根本的な疑問が付きまとう。

「日本人である」ということと「キリスト教徒である」ということを考え合わせようとするとき、その双方の定義ないし輪郭の不明瞭さがつねに気にかかる (鶴岡 2012: 73)

「日本」と「キリスト教」を論じるには、ある論者の言う「日本」や「キリスト教」がどういうものであるのかを明らかにしないことには、議論は空転するばかりであろう、という指摘として理解すれば、これは「日本的キリスト教」の提唱者だけでなく、それを研究対象として検討する側についても指摘され得ることである。「国家主義」や「天皇制」への接近、癒着と一口に言っても、「国家主義」や「ナショナリズム」、「天皇制」や「天皇」をどう理解するかは常に多様であり、一様ではない。同じことは「キリスト教」についても言える。「日本的キリスト教」の国家権力への順応、癒着を批判した笠原は、ひるがえって「それなら純粋なキリスト教とはなにか、はたして純粋なキリスト教というものはあるのかという問題がおこってくる」(笠原 1974: 136) ことに気付いている。

よって本論文は、「日本的キリスト教」についての評価とは別に、あるいはそれ以前に、「日本的キリスト教」とされた佐藤定吉の思想における「日本」と「キリスト教」がどのようなものであるのか、そして佐藤が独自の観点から両者に結びつけた「科学」の関連のさせ方がどのようなものであったのかを明らかにする。言い換えれば、規範的な問題関心からではなく、それはどういう宗教や信仰なのかという事実問題への関心 (脇本 1997: 15-17) から、佐藤の思想を見ることとする。

1. 「天皇行法」

佐藤定吉は生涯を通じて数多くの著作を発表し、自ら発行した雑誌にも多数の記事を執筆したが、最晩年の『日本ということ』がそれまでの著作と違うのは、「天皇行法」というものが持ち出され、「自霊拝」や「あじまりかん」といった言葉が重要なキーワードとなっている点である。佐藤によると、天皇行法とは、天照大神から伝えられ、歴代の天皇が行った秘法であり、天皇とは、この行法を修行し、「その行法の『いのち』が、御身の中に Incarnate なされた御方をいう」(前 46) のだという。天皇の資格は、この行法の修行を完了することによって得られるものであり、この行法の修行によって「天皇の位格」(前 46) が定まるのだとされる。

この行法はある家に受け継がれ、その家の人々は「天皇の背後にあつて、専心その道を修行し、たえず天皇に奉仕し」、「天皇の蔭に侍して、奉行申し上げる」(前 46) ことから、天皇行法は別名「天皇神道」または「山蔭神道」と称しているという。

佐藤は1957年8月に、この山蔭神道の当主に面会して、次のように言われて天皇行法を知ったという³⁾。

自分の家筋は、山蔭神道と申して、応神天皇以来今日まで、『天皇行法』を司どり、天皇御自らが行ぜられる神道の秘法をお預かりしている家柄である。〔中略〕敗戦後の日本は、どうしてもこれを日本だけでなく、国際的にも紹介したい。〔中略〕何としても、欧米文化の中心力である科学と、さらにキリスト教に通暁されている人の援助を必要とする。あなたが、その人であることを信ずるから、この目的のために協力して欲しい (前 47)

この山蔭神道の当主について、『日本ということ』の本文に名前は出ていないが、改版された『日本と

はどんな国：秘められた人類救済の原理』に山蔭基央という人物が序文を寄せており、この人物が佐藤に天皇行法を教えたようである。

山蔭基央には、1978(昭和53)年発行の『神道入門 その一』という著作があり、その奥書の著者紹介には「やまかげもとひさ」の読み仮名がふられており、1925(大正14)年に生まれ、「古神道の家を相続し、一意専心“神道の世界化”について研鑽して今日に至る」とある(山蔭 1978)。同書で山蔭は、今や世界の宗教は根本的に行き詰まっているとし、神道の4大徳であるとする「清くあること、明るくあること、正しくあること、素直であること」(山蔭 1978: 213)は世界の各宗教に共通するものなので、他宗教の人にも受け入れやすいはずであるとする。また、神道は広義の意味での「宗教」ではあるが、「教祖・教義・教典・シンボル」を備えていないという点からは「宗教」ではない。しかし、むしろ「宗教」ではないからこそ、「神道思想や行法をキリスト教やマホメット教が受け入れても罪にはならない」のであって、日本の神道は世界に貢献できるのだとする(山蔭 1978: 212-213)。

こうした世界宗教の行き詰まりや、それを解決するものとしての神道という位置づけは、佐藤と共通するものがある。佐藤が山蔭に会ったという1957(昭和32)年8月以前の山蔭の著作は見当たらないため、こうした発想を山蔭が佐藤に会う以前から持っていたのか、佐藤から得たのかは分からないが、出会った際に佐藤が山蔭から受けた説明が本当であれば、日本から神道、ないしはそれをもととした新しい宗教を世界へ広めたいという点において、両者は意気投合したものと思われる。そのため、『日本ということ』前半の執筆意図は、「米英の有識者」(前7)に「日本神道」(前2)を伝えることとされている。

さて、その山蔭から教えられた天皇行法について佐藤は、この家に伝えられた記録と行法にもとづき、後継者から直接学んだ内容に佐藤が「生涯を通じて体得体信し、自分の血と肉になつているキリストの福音信仰」と「科学の見地から見た体験と智見を加

え」(前48)で『日本ということ』に記したという。

また佐藤は、「その内容をつぶさに拝して見ると、それが聖書の最高の秘儀である『世の罪を負う神の子羊』となる十字架の奥義の真髓であつた」(前96)と書いており、これを読む限りでは、佐藤は天皇行法を実際に見たようだが、具体的な所作などについての説明はない。

佐藤は、この天皇行法は「自霊拝」と「あじまりかん」の二つから成るとする。そして、この二つが「『日本神道』という一生命的元素の原子核にあたるもの」(前53)であり、「日本という一つの『いのち』の樹の『幹』にあたる」(前53)という。そのため、「日本神道」を学ぼうとする「欧米の諸君」は、まずこの自霊拝と「あじまりかん」を学び、修行することで、「日本神道」の真髓を把握してもらいたいという(前54)。それは、明治以来、日本人が欧米に留学した際、まず物理や化学の基礎理論を学び、その応用として工業を実習することで、科学とその応用をいち早く把握したようなものである(前54)、というたとえがいかにも「科学者」佐藤らしい。

では、自霊拝と「あじまりかん」というのは何なのだろうか。

2. 「自霊拝」

まず、自霊拝について佐藤は、「自己の『たましい』を一枚の明鏡に保つこと」(前55)であるとする。

鏡自らは、ただ冷い光のないものである。然し、光がうつると、鏡は全く見えなくなり、そこに見えるものは、ただ天の明月だけである。こうした天の明月と地上の一枚の明鏡との関係に、『神』と『自分』を常に保っている行法のことを、『自霊拝の行法』という。また、そういう『人』のことを『自霊拝の行者』という。(前57)

鏡が光を映すように、人が曇りなく神を受け入れ、

神のあり方や精神を自らのものとするを理想とし、それを目指すのが自霊拝ということのようだ。そうした行法を行う人は神を映す「一枚の明鏡」となることから、「その鏡を見たものは、天の父神の光を見たものになるであろう。そして、それまで見えなかった『神』のすがたを、まざまざとその『人』の中に見つめることが出来るわけだ」(前 58)という。自霊拝を行う者を通して、他の人々は神の姿や光を見ることができるのだという。

ここで触れられている「神」と「人」との関係について、佐藤は「幹と枝」の関係であるとしている。

『神』と『人』とは、決して懸隔してはいない。幹と枝の在り方である。相互に一体化しているのが本義である。即ち、神人一如が宇宙の実相である。これがイエスの宗教体験であり、また日本の自霊拝の体験である。(前 58)

ここでは神と人の両者が一体であることが「本義」であり「実相」とであるとされているが、後で見るように、天皇と国民、そして国の関係も「幹と枝」のあり方として語られ、それらが一体であることが「本義」とされる。

なお、こうした説明で「天の父神」と言ったり、「イエスの宗教体験」が持ち出されたりするように、佐藤は聖書やイエスを引き合いに出して自霊拝を説明する。

イエスは、『われを見し者は、天父を見しなり』(ヨハネ伝十四章九節)と自己を紹介しておられる。そのイエスの霊の在り方と同様の在り方に成つていることを、日本では『自霊拝の行者』と申しているのである。日本神道の奥義は、ヨハネ福音書中の十四章九節の『神のことば』の通りに、自分の『たましい』を保つ行法である。日本という国は、その行法を幾千年の昔から、天皇御自身が身を以て実践しておられた国であった。(前 57)

「日本神道の奥義」である自霊拝は、イエスを見るのが神を見ることにもなるような「イエスの霊の在り方」なのであり、それを日本の天皇が受け継ぎ、実践してきたというのである。『日本ということ』では、全体に渡ってこのように聖書やイエスが引き合いに出される。上記の引用部分の「たましい」のあり方も、イエスが誰にも語らずに秘めていたものであり、それと同じものが日本の天皇に受け継がれてきたのだという。

イエスが誰人にも語らず、秘めておられた『たましい』の在り方と同じ内容の行法が、不思議にも日本の天皇行として、今日まで皇統連綿として、脈々わが日本に伝えられているのである。(前 57)

だが、自霊拝が具体的に何を「行」であるのかは、「自霊拝の行法の実際については、言葉の表現を越えるから」(前 59)として、語られない。自霊拝がどのようなものであるのかについて、佐藤に天皇行法を伝えたという山蔭は以下のように説明している。

これは読んで字の如く「己が霊を拝する」わけだが、その形式は「鏡の中の自己の姿に礼拝する」方法である。〔中略〕全員が個々に、鏡の前に座って、静かに自己の姿を映し、まずその姿を眺め、静かに“己が姿”に向って感謝の言葉を献げ、おもむろに礼拝するのである。(山蔭 1980: 78)

山蔭によると、鏡の中の自分を改めて見直すことになるため、当初は自分の醜さに恥ずかしさが湧いてくるが、この自霊拝を続けているうちに、顔面の皮膚は浄化し、清明になってくるという。そして、清明になった自分の顔を見ていると、自分の内面を見ることができるようになるという(山蔭 1980: 79)。

自己の内面を見つめるという点は、いわゆる内観

ということになるが、山蔭は「天皇の内観」としての自霊拝についても述べ(山蔭 1980: 127)、こうした「天皇の内観」は「民のことを先ず考える」(山蔭 1980: 128) 修行であるという。また、山蔭は大嘗祭に関連して、この祭を通じて「天皇が国民の総てを、我が人格の内分に抱き給い“一心同体”の関係を自覚あそばされるのである。だから、“日本国の神秘体”としての“天皇”は、国民を我が心の内に抱き給うのである」(山蔭 1980: 126) とする。佐藤も山蔭も、自霊拝を通して主張しているのは、天皇あるいは国と国民の一体化ということになる。

3. 「あじまりかん」

次に、「あじまりかん」について佐藤は、最も神秘的なものとして恐れ崇められている言葉であり、「南無阿弥陀仏」という念仏の名号や、「南無妙法蓮華経」という題目のように唱えられる言葉であると説明する(前 59)。この「あじまりかん」は天皇を中心に熱心に唱名され、自霊拝よりも更に重んじられ、尊重された言葉であるという(前 60)。

佐藤は、子供に対する親の愛の端的な表現は、親が子供の罪を負おうとすることであり、そうした「愛」こそが神の本質であるとする。そうした神の愛の「うつし身」となって、他者の罪を引き受け、救いの手を差しのべる者となる実践の道が「あじまりかん」の行であるという(前 62)。そして佐藤は、これこそが聖書の「十字架を負う神の子羊」となることであり、こうした「十字架を負う神の子羊」となって、全人類を滅亡から救い出すことが、「日本国家の根本生命」であり、「日本国家の唯一の存在使命」であると(前 62)。

ただし、ここでの「救い」は個人の霊を対象としたものではなく、国家や民族を対象としたものだという。

日本に使命づけられている『あじまりかん』は、個人救霊に目的はない。それはすでにイスラエ

ル民族の方で、イエスの十字架によつて完成している。日本の『くに』の負う使命は、個人救霊でなく、一国家、一民族を一単位の生命体にして、神に献身させ、霊なる神の『うつわ』にさせることである。(前 62)

個人の霊の救済は「イスラエル民族」の担当であり、イエスの磔刑によって完成しているが、日本の使命はそれをさらに国家や民族を対象とする救済に広げることだという。日本は「全世界の救いの在り方のために太古から選ばれて、今日まで神の聖手によつて守護され、導かれた国」(前 63) なのだという。

佐藤は次のようにも言う。

嘗て神は、キリスト、イエスを十字架につけて、神の巨力誘導の源泉となさせられた。日本という『くに』も、イエスにならつて、『国家』が一人格となつて、十字架を負う神の子羊になる『くに』であつた。(前 63)

明言はされていないが、日本が「十字架を負う神の子羊になる」というのには、敗戦が踏まえられていると思われる。

こうした「あじまりかん」の説明に見られる、古代イスラエルおよびユダヤ人と日本とのつながりは、『日本ということ』の随所で強調される。佐藤は、「あじまりかん」という言葉の意味について、ヘブライ語と日本語の関係について研究している在米の牧師である川守田英二という人物に問い合わせたという。そして、川守田から「周到な研究を試みた結果、自分としては、『世の罪を負う祭司長』という意だと断定したい！」(前 60-61) という返事を得た。ただし、佐藤自身、確定するにはまだ実証の材料が不足しているとしている。

ここで名が挙げられている川守田英二は、1891年に岩手県に生まれて東北学院神学部を卒業した後、サンフランシスコ神学大学へ進んで修士課程を修了

し、シアトルやサンフランシスコなどの日本人教会で牧師をつとめた人物である(鈴木 2020: 233)。『日本ということ』の中で佐藤は、川守田の近著として『日本ヘブル詩歌の研究』(川守田 1956)を挙げ、古代日本の言葉の中にヘブル語(ヘブライ語)が残っており、それが日本各地の民謡として伝えられていることを立証しようとしたものと紹介している(前 61)。

川守田の『日本ヘブル詩歌の研究』は、扉に三笠宮崇仁親王への献辞を掲げ、日本語の語源がヘブライ語にあるとして日本人とユダヤ人を結びつけ、「伊勢は日本のエルサレム」であり、「『伊勢音頭』はモーセの令姉であったミリヤムの歌である」とし、「エホバ礼拝は往古日本全土を風靡していた」と主張するものである(川守田 1956: 2)。そして、「日本皇室はヒゼキヤ王第一王子インマヌエルを介して、ダビデ王の永遠の王座を踏襲した世界最古の王族である」(川守田 1956: 6)という。これは、いわゆる「日ユ同祖論」の一つであるが、川守田自身は青森の「イエスの墓」のような話を軽蔑しており、それらと同列に扱われることを拒否している(川守田 1956: 3-7)。佐藤はまた、川守田の新作として、聖書の歴史と日本の歴史の密接不離の関係を明らかにしたものを挙げている(前 61)。これは、『日本エホバ古典』(川守田 1959)のことと推定される。こうした川守田の試みも佐藤同様、皇室を中心とする日本理解をキリスト教や聖書と接合しようとしたものと言える。

では、自霊拝と「あじまりかん」はどういった関係にあるのだろうか。佐藤は、自霊拝は望遠鏡のレンズであり、「あじまりかん」は天の光であるとする(前 66)。自霊拝は、天の光である「あじまりかん」を自らの心の内部に正しく導入する方法であって、自霊拝そのものは目的ではないのだという。自霊拝によって心が明鏡になれば、おのずと天の光は力強く心に注ぎ込まれ、「天の側の『いのち』が、そのまま『うつし身』となつてあらわれてくる。そこにおのづから神御自身の活動が、その人の中にあらわれ

る結果を産む。この神の活動の『あらわれ』が、即ち『あじまりかん』である」(前 66)という。

こうした佐藤の説明からは、自霊拝が一種の修行法であることは分かるものの、「あじまりかん」については、題目のように唱えられる言葉であったり、修行であったり、天の光であったりと、一貫した理解を得ることは難しい。とはいえ基本的には、自霊拝を通じて自らを、神を映す「レンズ」「明鏡」と化し、そこに天の光を導き入れる修行を積む、あるいは「あじまりかん」と唱えることで、人の行いが神の活動を反映したものとなる、ということのようである。

佐藤は、こうしたことを知ったことによって、次のような心持ちになったという。

多年自分の心の中にわだかまっていた一切の暗雲が、からりと晴れ、まことに大空に聳ゆる富士の高嶺を仰ぐような気がする。[中略]これまで、キリスト教と日本国体の間に、何かしら、お互に矛盾するものがあるところを見出し、越え難い対立感の中にあつた。ところが、この燦たる『あじまりかん』の光を仰いで、入信以来、過去五十数年の暗雲は、全く晴れわたつて了つた。(前 67)

ここでは、はからずも佐藤自身がキリスト教と「日本国体」の間に葛藤を抱え続けていたことが吐露されている。

4. 「あじまりかん」の行者としての天皇

こうした自霊拝と「あじまりかん」についての理解をもとに、佐藤は日本について、「日本は本来、『あじまりかん』の国、即ち十字架の贖罪愛を実践する国であつた」(前 67)とし、「『自霊拝とあじまりかん』の『いのち』が満ち充ちあふれている『くに』が日本」(前 97)であるとする。

そして、その日本の天皇とは、「『あじまりかん』と自霊拝』の二つが、赫々と日月のように輝き出てお

られる人のこと」(前 96)であるという。天皇は、「国」の「いのち」の根から生えた「幹」であり、その天皇の「臣下」であるということは、天皇の幹につらなる小枝になったということであるとされる(前 97)。佐藤にとっては、ここに「日本という国体」の本義があり、「国」と「天皇」が一如である関係も決定されるという(前 97)。

同様のことが以下のようにさまざまに表現される。

日本国民の各自には、『くに』が一つの強大な磁場であり、天皇はその磁極、そして国民の各自は、一本の小さな磁針の関係につながれている。(前 100)

日本は『先験的』な血のつながりにより、凡ての理論と凡ての利益を越えて、宗教的に『くに』と国民の『たましい』が一つにつながれ、それが、根本の出立点となつて、社会全般の在り方がきまっている。(前 100-101)

いずれの表現においても、天皇と国、国民の一体化が訴えられており、「聖書的に云うと、日本という国は、社会が構成される以前から、一つの『エクレジア』であり、神を中心に個人の『たましい』が一つにつながれて来た国である」(前 101)という。日本は一つのエクレジア、すなわち教会なのだという。

ただし、これは国民が天皇に一方的に奉仕するような関係とはされていない。「天皇は民草のために死に、民草は大君のために死ぬ」という『身代り』の代償愛に生き合うことが、日本の『くに』の在り方である(前 101)として、天皇にも「民草」のために死ぬことが求められている。天皇は国民がただ崇め奉るだけの対象とはされていないわけであり、そのため、「天皇御自らは、断じて『神』ではない」(前 65)と、天皇が神であることも否定される。

「天皇」御自身に、神の権威があるのではなかつた。またその御方が神聖にして犯すべからざる

御方ではなかつた。ただ天皇は一面の明鏡であられたのである。(後 9)

そして佐藤は、天皇は「神の贖罪愛のために、一身をささげておられる『あじまりかん』の行者であり、十字架を負う神の子羊でいまし給うたのである」(前 65)とする。神ではないとされつつも、天皇にイエスが重ねられていることは明らかであり、佐藤は次のように述べている。

日本における天皇行法の「あじまりかん」とその「いのち」をうける「自霊拝」の在り方は、それが、そのまま「キリスト・イエス」の三年間の公生涯の在り方であり、またその最後の十字架の光そのものであつたのだ(後 93-94)

さらに佐藤は、「十字架」について、「小乗の十字架」と「大乘の十字架」という区別を設定する。自らの罪が赦され苦悩から解放放たれることだけを目標とするのは「小乗の十字架」であり、真実のキリスト教の真髄は、信者各自が小乗的十字架の段階を乗り越え、大乘的キリスト教の真髄である「世の罪を負う神の子羊」になりきることであるという(後 49-50)。

これは佐藤によるキリスト教の分類であつて、小乗的なキリスト教は「入門」に過ぎず、罪から解放された後に身を捧げて「神の産業に用いられる『小キリスト』となり、自らが他の罪責を負う神の小羊になる」(後 114)大乘的なキリスト教こそが「本門」だという。これまでの欧米のキリスト教は、「入門」のところまでは導いてくれるが、「本門」は隠したまま今日に至っており、それが現代のキリスト教が行き詰まっている真因であるという(後 114)。

天皇についても、「世の罪を負う神の子羊」たるべき存在とされる。

この「世の罪を負う神の子羊」になることが、即ち、天皇行の中心核であつたのである。即ち、そ

れが「あじまりかん」の一大行法である。つまり、この「あじまりかん」の行法に全生命を賭けて、それに奉^{マツ}行せられた御方が「天皇」である。(後 50)

佐藤は、こうした天皇の自霊拝と「あじまりかん」のあり方が古来の神道の外形的表現を決定していたとして、それは「原子核内部の在り方が、元素の外形を決定する事実^{マツ}に似て」(前 53) いるとする。

では、その「原子核内部の在り方」とはどのようなものなのだろうか。

5. 「原子核内の素粒子は語る」

佐藤によると、近代科学は、原子核内部の素粒子がどういう結びつき方^{マツ}をしているのかを解明するとともに、その結びつき方によって物質の状態が異なることを明らかにした(後 83-84)。物質は、つながり方という観点から、破壊が容易な「化合物」と、変化することなく不滅に見える「元素」に分けられる。元素の内部を見ると、素粒子が特別な結び方でつながれており、この「元素内部の特殊なつながり方^{マツ}に、堅く一体にむすばれている処に、凡てのものが、万代に不変不易のすがたをあらわしてくる」(後 84) という。

このことを佐藤は以下のように説明する。水は一つの酸素原子に水素原子が二つくっついた化合物だが、酸素原子と水素原子の結びつきは電流を流すなどすれば簡単に分断され、ばらばらになる。これは政治や経済が利害関係で離合集散する社会のあり方に似ている(後 89)。これに対して、原子核内部の素粒子のつながり方を見ると、陽子と中性子の二つが中間子によって、どのようにしても断ち切れない強さでお互いに引き合っている(後 90)。そこには、利害の関係ではなく、「『いのち』の人格的な力、即ち『愛』に根ざしたむすびの活動」(後 90) が現れているという。この「愛」のあり方の真髓を「神は、原子核の内部に、素粒子の在り方として、秘密裏に

書きしるしてあつた」(後 93) のであり、そのことを「原子核内の素粒子は語る」(後 83) というのである。

これはいわば、「陽子と中性子の二つは仲の良い夫婦のような関係にむすばれ」(後 90)、中間子は「その生命がけの愛をつなぐ力」(後 90) になっているのであって、中間子の交流によって陽子と中性子は、その性格を互いに絶え間なく入れ替え合いながらつながっているのだという(後 91)。陽子という夫が中性子という妻の性格に変わり、妻はまた夫の性格に変わって、互いの「いのち」が交代し合いながら活動をしているとも説明される。

夫と妻という個々の独立した存在をもちながら、いつでも、夫の「いのち」は、妻の「いのち」になりきっており、妻はまた夫の身代りになりきって、生きてゆく。両者が互に自分の生命を捨てて、夫は妻の重荷を引きうけ、妻に代つて死んでやろうと自分の存在を消している。妻は、また夫の身になりきって、夫の為に死んで夫を生かしてゆこうとする。互の性格が、刻々交替して、二つが生命的には一体になりきった在り方につながれている。(後 91)

さらに、この身替りの素粒子にあらわれた「愛」は、そのまま十字架上のイエスの姿でもあり(後 93)、日本では太古からこの「愛」が天皇行法の中心である「あじまりかん」として行われていたという(後 93)。

このように「生命がけで愛しあっている夫婦」は捨身の愛という「いのち」の「波」によってつながっているのであって(後 91)、これこそ仲の良い夫婦の典型であり、最も代表的な「忠」と「孝」のあり方であると佐藤は言う(後 92)。

夫婦の愛とか、日本でいう「忠」とか、「孝」とかいうものは、万代にわたる神の神秘のあらわれであり、神のじきじきの傑作、秘中の秘であ

る神の極意である。是が即ち原子核内部の天壤無窮に至る在り方の具体的な雛型の「あられ」であつた(後 92)

こうした原子核内部の真理の「つながり方」に自らの「いのち」のつながり方を重ねれば、「凡ての国、凡ての家庭、凡ての個人が、天地と共に無窮に生きぬきうる万代不易の『すがた』に聖化されてくる」(後 85) のであって、ここに「日本神道」の奥義もあるという(後 85)。

さらに、すべての宗教の極意は、先の夫婦のたとえにある身代りの代償的な愛の実践にあるとされる(後 123)。そして、世界宗教の帰一点は、原子核内の陽子にあたる神と、中性子にあたる人の「むすびかた」にあり、神と人の魂をつなぐことがすべての宗教の最高のねらいなのだという(後 123)。

6. 「日本」

『日本ということ』の冒頭で、佐藤は自らの一生涯の仕事として成し遂げたいことが二つあったと述べている。一つが、「『科学と宗教』の関係をつかみ、その光で世界宗教の『統一の道』を見出したいということ」であり、もう一つが、「『日本』とはどんな国なのか？また日本国民が「いのち」をささげて信奉すべき『宗教』とは、どんな宗教であるか？」ということであったという(前 1)。

このうち、「科学と宗教」の問題は、原子核について科学が明らかにしたことで懸念がすらりと解け、「私には無くなつた」(前 2) という。「世界宗教の統一の道」という点については、上に見た「神と人の魂をつなぐことがすべての宗教の最高のねらい」というのが答えということになる。では、「日本とはどんな国なのか」、「日本国民が信奉すべき宗教とは」という点については、どうなるのだろうか。

まず佐藤は、神道について誤解していたという(後 106)。その誤解というのは、神道は罪の観念が稀薄で、キリスト教のような十字架愛があらわれて

いない、神の「みことば」の光が弱いといった欠陥があり、それをキリスト教の福音によって補強しなくてはならないと思い込んでいたという(後 106-107)。大平正芳が参加した「イエスの僕会」の活動も、「神道の一つの畑にして、その中にキリストの十字架の生命を芽生えさせることを目的」(後 107) としたものであった。

ところが、天皇行法と自霊拝、「あじまりかん」を学び、その奥義が「あじまりかん」に帰一すること、さらに「あじまりかん」とは「罪責を負う祭司王」という意味だということが分かったことによって、日本という国の中核は、「とりまおさず、十字架愛の行者になること」(後 107) であることを見出したという。そしてこれは、日本という国が神の贖罪愛の権化の国になることを意味するという(後 108)

「国家生命の代表者である天皇」(後 108) が贖罪愛の第一人者になるのだから、国民もこれにならい、日本という国全体が「キリスト、イエスの十字架愛の信者として生きる国になる。それが、日本の国の本来の面目であつた。日本国家の本領はまさに、此処にあつた」(後 108) という。イエスが世界人類の罪を負って十字架の上で「神の贖罪愛の為の祭司王」(後 108) となったように、日本は「国」が一人格となって十字架愛の祭司王となるのであり、自霊拝と「あじまりかん」の天皇行法も、そのためのものであって、「十字架愛の国こそ、日本であつた」(後 109) という。

仏教やキリスト教が個人の救いを導くものであったのに対して、「日本国体の本質的使命」(後 125) は、国家の救いを指示し指導する役割に置かれている。日本は聖書に予言された「神の国」を地上に打ち建てるための雛型国家なのであり(後 46)、「日本はまことに『聖書相応の国』である」(前 97)。この「神の国」は、神からの「霊のいのち」を中心として、人と人や国と国が神の秩序の中で組み合わせられると出現する(後 124)。「聖書相応のもの」である「いのち」を持つ日本という国は「神の国」の「雛型」なのだ、というのが佐藤のたどり着いた「日本」理

解であった(後 124-125)。

7. 佐藤定吉の「問い」と「答え」

以上、見てきたように、最晩年の佐藤定吉がたどり着いた「真理」は、「キリスト教」を「自霊拝」と「あじまりかん」という特異な用語で「日本」や「天皇」と結びつけ、それを科学的知見で根拠づけようとするものであった。佐藤にとっての「科学」とは、神が真理を書き込んだもの、あるいは神の真理が示されたものを読み解く営為であった。そうした「科学」によって原子の構成などを読み解いた佐藤にとっての「キリスト教」は、自らが他者の罪責を負う「神の小羊」になることを「本門」とするものであり、個々人がイエスに倣うことを求めるものであった。そして、佐藤にとっての「天皇」は「贖罪愛の祭司王」として、その範を垂れるべき存在であり、そうした「天皇」と国民が一体化した「日本」は諸国家の救いを指導して「神の国」の実現をもたらすべき存在であった。それが「科学」の知見と矛盾しない「世界宗教」であり、日本国民が信奉すべき信仰として佐藤が出した「答え」であって、「真理」であった。では、なぜそのような「真理」を佐藤は必要としたのだろうか。佐藤の「答え」は、どのような「問い」に答えるものだったのだろうか。

『日本ということ』の冒頭で佐藤は、日本人の宗教である神道を、キリスト教や仏教の欠陥を補う、より高い段階のものへ引き上げようとしたと述べている(前 2)。既存の神道は佐藤にとって満足できるものではなかったわけである。そして、「科学の基盤に堅く立つた世界宗教の樹立」と「日本国民が生命をかけて信奉すべき唯一無二の最高の信仰の在り方」を決定して、世界と日本人に紹介することができれば、いつ天に召されても何一つ心残りはないという(前 3)。すなわち、科学の知見と矛盾しない「世界宗教」とは何か、日本国民が信奉すべき信仰とは何か、というのが佐藤にとっての「問い」であったことになる。

こうした佐藤の「問い」は初期から最晩年にかけて、ほぼ一貫していた。佐藤は、宗教に関する最初期の著作においてすでに、「科学と宗教とは断じて矛盾す可きものではない。一致すべきものである」(佐藤 1924a: 4) との態度をとっている。

大自然は偉大なる力の顕現である。即ち宇宙は力である。この科学的事実は「神は愛なり」とのヨハネの結論に当然逢着する。[中略]この愛を主観的に力と生命の根本とに観た処に宗教が生れて来る。又この力を客観的に理性の上から静観した処に科学が生れて来るのである。(佐藤 1924a: 486)

科学と宗教は、見方は違っても同じものを見ているという。佐藤にとっての「科学」とは、神の真理を客観的に理性の上から読み解く営為ということになる。科学研究のエリートであったにもかかわらず、そこから離れて宗教活動に踏み込んだ佐藤の選択は、傍目には無謀な方向転換と見えるが、本人にとっては方法を変えただけで目指す探究の方向は変わっていなかったのである。

佐藤に言わせると、日本には科学も宗教も欠けていた(佐藤 1924a: 2)。日本に欠けているものを補うという点でも、科学に携わろうが宗教の樹立を目指そうが、佐藤にとっては同じだったのである。とはいえ、「科学には比較的入り易いが、宗教には入り難い」(佐藤 1924a: 2)。だが、佐藤はあえて宗教の道へ入ることを選び、科学の知見と矛盾せず、なおかつ世界に通用する普遍的な宗教とはどういうものなのかを自らの「問い」とした。そして、それを探究することは「神が人に残されたる一大事業」であると考えた佐藤は、「基督の示したる愛の力学を、科学的に体系を整へ、物理学や化学を学ぶ如く、之を普遍的真理として万人に示す事」(佐藤 1924a: 487)を自らの使命とした。

こうした使命感の背景には、日本の状況への切迫感があった。

日本の社会問題、思想問題、産業問題の行詰まれるを見るとき、日本の国を救ふ手段は、心の統一状態に來らしめることである。七千万同胞がある一つの力に統一されるとき、日本全体としての力が表はれる、そこに日本の新天地が伸びてゆく。(佐藤 1927a: 69)

そして、そうした「統一状態」を実現するための「答え」も、基本的なかたちはすでに初期の段階で出来上がっていた。佐藤は、「宗教とは神と人類に対する人間各自の責務を言ふもの」(佐藤 1924b: 13)であるととし、「人間は天と地をつなぐ一本の管である」(佐藤 1924b: 13)としていた。

人は精神生活の根本たる神の光を、地に伝播する尊い一つの管であると私は信ずるのである。天の力を地に伝える一本の管としての御互一人々々の人間の尊い責務を直感する処に宗教が生れ来る。(佐藤 1924b: 14)

この発想をもとに佐藤は、「この一本の管を通して、如何に、天と地をつなぎ得るやとの問題」(佐藤 1924b: 15)を自らの問いとして設定した。そして、30年以上の歳月を経た最晩年の『日本ということ』において、自霊拝によって自らを「レンズ」と化して神を映し、「あじまりかん」を唱えることで、その「レンズ」に天の光を導き入れ、人の行いに神の活動があらわれるように努める、という「答え」にたどり着いたことになる。

ただし、「レンズ」のたとえは、実はこれも初期の段階から現れている。「レンズを通じて、天国を望めば神の姿は、晴天に太陽を仰ぐ如く明瞭に見えてくる」、「神の光が人間の心のレンズに集中し焦点が合ふと、他の冷たいものをも燃やし始める」(佐藤 1927b: 38)といった表現である。また、『日本ということ』において、天皇と国民の関係を幹とそれにつらなる小枝にたとえているが、これに類似した表現も、人々が「基督の葡萄の幹に連なる一つの枝と

し、蔓としての各自の実生活をなすに至らなければ、永久に人類は救われぬ」(佐藤 1924b: 15)というように、初期の著作に見られる。

佐藤にとっての「問い」も、そして「答え」の基本的な方向性も、初期から最晩年に至るまではほぼ一貫していたのである。これは、同じことを表現を変えて繰り返していたとも言えるが、客観的な状況の変化に動じず、転向することもない「理屈の人」(植村 2010: 20)としての一貫性とも見える。

8. 寛克彦の影

佐藤のこうした「問い」と「答え」、すなわち思想、信仰の形成に影響を与えたものとしては、生家が日蓮宗系の寺院であったこと、海老名弾正との出会いと感化による受洗、東京帝大での寛克彦の講義、卒業式で明治天皇から銀時計を下賜されたこと、山室軍平の救世軍との関係などが指摘されている(佐藤信 1970: 545-549, 岩瀬 1992: 16)。

これらを一見して分かるのは、キリスト教と天皇崇拜との葛藤を佐藤が抱え込んだことである。佐藤の「問い」は、その自らの葛藤の解消を求めたものであり、そのヒントになったであろうと推測されるのが寛克彦の影響である。大平正芳同様やはり総理大臣経験者である片山哲は次のように回想している。

佐藤君は特に宗教と科学、宗教とナショナリズム、東洋にキリスト教を広める等の問題に興味をひかれている様子であった。東大の寛博士の説かれるキリスト教とわが国の古神道を統合した一種独特の国家哲学説には、ことのほか深い興味を持ったようである。[中略]この寛先生の学説が彼の後年の考え方にも大分影響したのではないかと私は考える。(片山 1970: 300)

片山は佐藤と三高時代に出会い、そもそも佐藤をキリスト教へ導いたのも自分であると証言している(片山 1970: 297)。佐藤とは共に東京帝国大学へ進み、

佐藤にYMCAの寮を紹介してもいる。ここにある「笈博士」「笈先生」が笈克彦のことであり、東京帝国大学法学部の教授として行政法や法理学などを担当する一方、「古神道」や「神ながらの道」という独特の神道思想を提唱し、研究室を畳敷きにして神棚を祀り、講義を始める際に拍手を打つなどの奇行で知られた人物である。

佐藤が東京帝国大学に在学したのは1908(明治41)年から1912(明治45)年であり、同じ期間に東京帝国大学法科に在籍した渡邊八郎という、学習院大学や日本体育大学の教授をつとめた人物が4年生の時に笈の法理学の授業を聴講した思い出を書き残している。講義の内容は「西洋哲学史」で、ギリシャ哲学からローマ人の思想を経てキリスト教の確立までで1年かかったという。

先生が基督教を説かれる段になつて愈々熱が加はつてきました。特に基督教の確立即ちイエスの復活、なかんづく、従来基督教徒迫害の大きいなるリーダーであつたパリザイのパウルの点心——「われもはや生けるにあらず、キリスト我に於て活けるなり」の大悟。而してその変心者、裏切者の誹りを甘受し、敢然在来の教敵に降伏し、基督教確立の礎石となつた段を講述されるのを聞いて、私は不覚にも涙の流れるのを止め得なかつたのであります。(渡邊 1975: 488)

「パウルの点心」すなわちパウロの回心の逸話が熱を込めて語られ、思わず落涙するほどだったというのである。佐藤がどの年次に笈の講義を聞いたのかは不明なため、渡邊と同じ話を聞いたのかどうかは分からないが、もしこうした内容を聞いたのだとすれば、寺院の住職である父を持ちながらキリスト教を信仰するようになったという、回心とも言える経験を持つ佐藤も、何らかの感銘を受けたものと思われる。

笈自身がキリスト教をどう捉えていたのかについて、西田彰によると、笈はキリスト教に一定の評価

は与えつつも、自らの提唱する「古神道」をより優れたものとし、キリスト教を「日本基督教」として「古神道」のうちに包摂しようとしたという(西田 2023: 48)。西田は笈の著作から下記の部分を引用している。

基督教が若し古神道と融合する暁には西洋在来歴史的事情より偶然附加し来りたる不純の形式、並に彼の思潮に伴ふて存する偶然なる迷信を一掃し、誠に真に「イエスキリスト」の証得せられし信仰の精髓を自由に発揚したる更に雄大精緻なる日本基督教を創設せしめ、西洋諸国世界全般に逆輸出せらるべきことは必定である。(笈 1913a: 143-144)

この部分は、片山の言う「キリスト教とわが国の古神道を統合した一種独特の国家哲学説」に部分的に相当すると思われる。西洋のキリスト教の現状のあり方は真のキリスト教ではないとする点や、日本から新たな宗教を世界へ広げようとする点が西洋のキリスト教を小乗的とし、日本からの「世界宗教」の樹立を目指した佐藤と重なる。

また、西田によると、笈の唱える「古神道」においては、天上世界のアマテラスの直系子孫である天皇を通じた、神と人、人と人との合一、相互の一心同体が果たされるべきものとされた(西田 2023: 31)。これも、「あじまりかん」の行者としての天皇を通じた神と人との接合という佐藤の考えと重なるものである。

さらに、佐藤による「神ながらの道」への言及も笈の著作と近似している。たとえば、^{あめのみなかぬしのかみ}天之御中主神について佐藤は次のように述べている。

天之御中主神こそは、全一として全天地を統べ給ふ普遍の実在であり、天地間の一物たりとも、此の天之御中主神の表現たらざるものはないのである。(佐藤 1930: 12)

寛による天之御中主神についての説明は次のようになっている。

天之御中主神は到る所に其の儘御存在になり、如何なる事物も天之御中主神の表現たり得ざるもの無き次第であります。(寛 1925: 38)

佐藤の著作の中に寛克彦の名前を見出すことはできていないが、これらは類似した内容と言えるものであり、影響関係を否定するのは、むしろ無理があると思われる⁴⁾。

おわりに

キリスト教と天皇崇拜との間で葛藤を抱いた佐藤にとって、寛の思想は何かしらヒントになっていたと考えられる。ただし、キリスト教と天皇崇拜の葛藤だけが佐藤の宗教活動の原動力だったわけではない。

佐藤が科学者としての栄達の道を捨て、宗教活動に踏み出してゆく大きなきっかけとなったのは、1924(大正13)年8月に2歳半だった5女慈子を失ったことである。そのとき佐藤は、我が子の死が「私共家族全体を救ふてくれるばかりでなく、どうかこれが生命の泉となつて、日本全体が救はれ、東洋全体が救はるゝ大きな力がこゝから流れ湧き溢れるやうに願ひまつる」(佐藤 1925: 52)と祈った。そうした想いが根底にあるからこそ、時勢の変化に影響されることが少なかったのであろう。

幼い我が子の死に直面した佐藤は、肉体は動かなくなっても靈魂はそれとは別に独立して存在し、決して肉体とともに亡びるものではないと「直覚」(佐藤 1925: 54)したという。佐藤にとって、それは「誰れがどう言はふと、私には動かす事の出来ぬ内的経験であり確信」(佐藤 1925: 54)であった。そして、「『生命の神秘!!』これが幼子が私へ授けた使命」(佐藤 1925: 55)であると感じ、「私の残る生涯の使命は死後の靈魂の状態を科学的に闡明する事であ

る」(佐藤 1925: 55)と決意したという。

素粒子のつながり方に人間や社会にも共通する永遠不変のものを見出そうという、傍目には荒唐無稽な発想は、決して亡びることはないと信じた我が子の靈魂を求めてのものだったのであろうと理解できる。また、天と地、神と人とのつながりを求めて、人間を管やレンズであるとした一見滑稽なたとえも、先立った我が子とのつながりを求めてのものだったと考えることができる。とはいえ、そうして始めた宗教活動のために佐藤は家をあけてばかりだったが(佐藤信 1970: 558-559)。

注

- 1) 『日本ということ』(佐藤 1964)は後半部分のページ数が改めて1ページ目から打たれている。そのため以下、同書からの引用は、前半部分のページ数を(前 34)、後半部分のページ数を(後 27)といったかたちで表記する。
- 2) 佐藤定吉の経歴や大平正芳の関わりについての詳細は住家(2019)を参照。
- 3) 山蔭と出会った時期について佐藤は、1930(昭和5)年9月から1932(昭和7)年6月までの米国での講演旅行から帰国した後の1932(昭和7)年8月としている(前 47)。しかし、『佐藤定吉追想録』の年譜にその時期の渡米の記録はなく、山蔭の発言とされるものの中に「敗戦後の日本」とあることから、これは「昭和30年から昭和32年まで」が「1930年から1932年まで」と間違っ書かれたものと思われる。ただ、『佐藤定吉追想録』の年譜に佐藤が戦後に渡米した時期として記録されているのは、1955(昭和30)年11月から1958(昭和33)年5月である。一方、佐藤の妻、佐藤文子は、1958(昭和33)年8月に亡くなっており、その前年1957(昭和32)年9月に入院しているが、その際、佐藤が付き添っていたことを息子の一人が証言している(佐藤智 1970: 598)。そのため、佐藤の戦後の渡米は1955(昭和30)年秋から1957(昭和32)年の初夏までで、帰国後の1957(昭和32)年8月に山蔭と出会ったものと推定される。
- 4) 寛克彦の『法理学第二巻 西洋哲理 上』(寛

1913b) の568ページと569ページの間には、デューラーが描いた「四人の使徒」の絵が掲げられており、この絵のマルコとパウロの部分は、後に佐藤が発行した冊子や書籍の表紙に用いられている。確認できたものとしては、佐藤の3つの著作(1958a, 1958b, 1958c)の表紙に用いられている。これが算の本を意識してのものだったのか、あるいはただの偶然の一致なのか、目下判断できるだけの材料は得られていない。

文献

- 原誠, 2005, 『国家を超えられなかった教会』日本キリスト教団出版局。
- 服部治, 1970, 「感謝と告白」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社: 533-535。
- 岩瀬誠, 1992, 「日本のキリスト教指導者佐藤定吉の神道理解」『国学院雑誌』93(1): 14-30。
- 寛克彦, 1913a, 『国家之研究 第1巻』清水書店。
- , 1913b, 『法理学 第2巻 西洋哲理 上巻』有斐閣書房。
- , 1925, 『神ながらの道』皇后宮職。
- 笠原芳光, 1974, 「『日本のキリスト教』批判」『キリスト教社会問題研究』22: 114-139。
- 片山哲, 1970, 「佐藤定吉君を偲ぶ」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社: 297-302。
- 川守田英二, 1956, 『日本ヘブル詩歌の研究 上巻』日本ヘブル詩歌出版委員会。
- , 1959, 『日本エホバ古典』友愛書房。
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会(編), 1988, 『日本キリスト教歴史大事典』教文館。
- 西田彰, 2023, 「寛克彦のキリスト教論」苅部直・瀧井一博・梅田百合香(編著)『宗教・抗争・政治: 主権国家の始原と現在』千倉書房: 27-50。
- 佐藤智, 1970, 「父母の最後について」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社: 594-600。
- 佐藤信, 1970, 「父の生涯を想う」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社: 545-564。
- 佐藤定吉, 1924a, 『自然科学と宗教』厚生閣。
- , 1924b, 『科学より宗教への思索』イデア書院。
- , 1925, 『死に直面せる体験』厚生閣。
- , 1927a, 「聖書講義山上の垂訓」『科学と宗教』3: 48-70。
- , 1927b, 「天国の八憲法綜括」『科学と宗教』5: 32-40。
- , 1928, 「信条」『科学と宗教』18: 6-7。
- , 1930, 「神の思ひ(第七回講義) 神ながらの道」『科学と宗教』35: 2-16。
- , 1958a, 『ロマ書霊解 第六巻』霊響山道場。
- , 1958b, 『ロマ書霊解 第七巻』霊響山道場。
- , 1958c, 「人はなぜ死ぬのか?: 死の科学と哲学と神学」霊響山道場。
- , 1964, 『日本ということ』正岡岩三郎。
- , 1974, 『日本とはどんな国: 秘められた人類救済の原理』たま出版。
- 住家正芳, 2019, 「青年大平正芳と佐藤定吉の『キリスト教』」『立命館産業社会論集』55-3: 39-53。
- 鈴木範久(監修)・日本キリスト教歴史大事典編集委員会(編), 2020, 『日本キリスト教歴史人名事典』教文館。
- 鶴岡賀雄, 2012, 「『日本人とキリスト教』の問題系に向けて: 柳宗悦の宗教観」加藤信朗(監修)・鶴岡賀雄・桑原直己・田畑邦治(編集)『キリスト教と日本の深層』オリエンツ宗教研究所: 73-93。
- 植村和秀, 2010, 『昭和の思想』講談社。
- 脇本平也, 1997, 『宗教学入門』(講談社学術文庫)講談社。
- 渡邊八郎, 1975, 「寛克彦先生と私」渡辺八郎先生遺芳録刊行会『渡辺八郎先生遺芳録』: 485-497。
- 山蔭基央, 1978, 『神道入門 その1(解説編)』白馬出版。
- , 1980, 『神道入門 その5(信仰編)』白馬出版。

SATO Teikichi's Understanding of Japan and Christianity in His Late Years

SUMIKA Masayoshiⁱ

Abstract : Sato Teikichi (1887-1960) is regarded as one of the proponents of “Japanese Christianity”, which interpreted Christianity to align with Japanese nationalism in the 1930s. He sought to combine Japanese Shintoism and reverence for the Emperor of Japan with Christianity. Wartime “Japanese Christianity” has been criticized for its conformity to state power. However, before assessing the historical significance or social importance of Japanese Christianity, any discussion of Japan and Christianity must first clarify what is meant by the terms “Japan” and “Christianity” as used by a particular thinker. Therefore, this paper uses the final work of Sato as source material to examine how he understood “Japan” and “Christianity”, and how he related science to both. For Sato, science was an endeavor to decipher divine truth. With regard to Christianity, Sato distinguished between an introductory Christianity, which aims solely to forgive one’s own sins and liberate oneself from suffering, and a core Christianity, in which each believer bears the sins of others. He believed that the essence of Christianity was to lead people to become the Lamb of God, who would bear the sins of others. He also believed that Japan’s successive emperors had taken the lead in bearing the sins of others upon themselves, and had continued their practices for that very purpose. Sato saw Japan as a nation in which the Emperor and the people were one entity, like the trunk and branches of a tree, destined to guide the salvation of other nations and realize the Kingdom of God. This paper also explores the influence that Kakei Katsuhiko had on Sato’s thinking.

Keywords : SATO Teikichi, KAKEI Katsuhiko, YAMAKAGE Motohisa, Japanese Christianity

i Professor, College of Social Sciences, Ritsumeikan University

